

「好きなこと、好きな人をつくりひろげ、自分の思いが出せる子に」

小学部研究

1 はじめに

小学部では、重度重複障害の児童のAグループ（訪問教育部生を含む）、知的障害を主障害とする児童（肢体不自由、視覚障害等重複障害の児童も含む）のBグループ、自閉症スペクトラムの児童のCグループに分けて、合同の場面ももちながら教育活動を行っており、約40名前後の児童が在籍しています。今年度はAグループ11名、Bグループ14名、Cグループ20名の45名が学んでいます。近年の傾向では、自閉症スペクトラムの児童の増加や、地域の小学校から毎年若干名転入が見られます。

教育方針は、「一人ひとりの児童の人格を大切にし、個別的・集団的指導を通じて具体的な目標の達成に努める。学校教育の入り口の学部として、一人ひとりの障害や発達の状況を把握し6年間を見通した実践に努め、それぞれの児童の発達及び可能性のより豊かな発現を図る。」としています。

教育目標は、以下のとおりです。

- ① 一人一人の児童の個性を生かし、健康で自主的な社会生活ができる基礎的な力を養う。
- ② 児童自身の思いや家族の願いを大切に、地域社会に参加する上での基礎的な力を養う。

2 研究の経過

(1) 方針

- ① 児童一人ひとりの実態を分析し、「教育課程」の作成、まとめを推進する。また教育課程の活用と課題整理を進める。
- ② 「教育課程」に基づき、クラス・グループ、学部全体で、「よりよい授業づくり」を目指し、学部テーマを視点とした授業研究、実践交流を進める。
- ③ 全校テーマに基づき、「小学部期に育てたい力」について研修研究を進める。

(2) 過去3年間の研究活動の経過（内容）

平成24年度	教育課程作成・学部内交流
	授業研究（グループ研を主体に）
	育てたい力について等
	グループからの実践報告、まとめ

平成25年度	学部テーマの設定
	教育課程作成・学部内交流
	全クラスからの実践報告
	「からだ」「あそび」「コミュニケーション」「小学部の教育目標から」等をキーワードに
平成26年度	卒業生の姿から学ぶ（障害の重い人の将来像のイメージを持つ）
	学部テーマ、継続
	教育課程作成・学部内交流及び見直しと課題整理
	「小学部で育てたい力」について
	テーマに沿った授業研究

(3) 研究の経過

ここ数年間は、小学部の研究方法として、グループ研を軸に、学部研で論議し、共有する形をとってきました。テーマについては、24年度「自立とコミュニケーション」で考え、「自発性」「主体性」「気持ちを向けて」などをキーワードに、それぞれのグループでの研究が行われ、グループごとのまとめで終わっていた経過があります。そこで25年度より、到達を踏まえつつ、学部全体でまとめていくことを追求してきました。25年度については、教職員も大きく入れ替わる中、小学部全体が互いのクラス・グループの実態や実践、大切にしていること等を知合うことを目標に、全クラスが実践報告を行いました。

また、25年度より、全校の「キャリア教育検討会議」からの提案により、全校テーマ「自分らしく人とともに生きる力を～それぞれのステージごとに育てたい力を授業を通して考える～」が設定され、これを受けて学部ごとのテーマを設定して実践研究活動を行ってきました。この全校テーマを受け、各学部で「育てたい力」をまとめ、12年間の流れで学校教育を考えようとしているところです。

小学部では、学部テーマを「好きなこと、好きな人をつくり広げ、自分の思いが出せる子に」としています。そしてこの2年間はテーマのもと、授業研究や授業交流を重ね、昨年度には「小学部で育てたい力」について、「信頼関係」「コミュニケーションの力」「からだの力」の3つに敢えて絞った形で提起してきました。今後この3本柱について内容をさらに深める必要があり、今年度は、とりわけ「育てたい力」のうちの「からだの力」

について、実践に基づき内容を掘り下げていきたいと考えています。

3 小学部のテーマ設定にあたって

(1) 全校テーマから考える

小学部の児童にとっての「自分らしさ」とは何か？と考えた時に、自分の思いが出せる、好きなことなら頑張れるという点が大事です。児童が好きなことをどう探り、引き出していくのかを考えていく必要があります。

「人とともに」では、先生や友だちなど、好きな人をつくり、安心して学校生活を送り楽しめることが小学部期にとって大事なことはないかと話し合いました。

「授業を通して」という点では、生活全般で育ちをとらえていくことが大事であり、その上で、授業の枠の中で子どもの成長・発達を支援していく観点を大切にしていこうと考えました。授業は、子どもの興味・関心を広げるきっかけづくりの場であり、持てる力を友だちや教師との関係の中で発揮する場でもあります。そんなよりよい授業をつくることをみんなで考えていこうと話しました。授業研究にあたっては、生活全体の中での位置づけや、生活との関連、教育課程の中での位置づけを明確にしていこうと確認してきました。

(2) 「好きなこと、好きな人をつくり広げ、自分の思いが出せる子に」

小学部の教育は、はじめて長い時間家庭を離れ、学校という「社会」への第一歩を踏み出すところを支えていく役割があります。心身共に幼く、最も身近な人との関係の中で成立してきた生活やコミュニケーションの力を、家族以外の人とでもしっかり交わせるように力をつけていく基礎を築いていきます。

そのためにはまだまだ身体的にも精神的にも幼いその子自身をまわりがよく理解し、コミュニケーションや興味関心の窓口を探し、教育の糸口(よりどころ)を多くつくっていくことが大切だと考えてきました。その子の好きなことやその子の持つ力を探り、それをより社会的文化的に意味づけ、位置づけていくこと、そして、人との関係に裏打ちされたものとして、子ども自身の人格(その子らしさ)と能力を高め、広げていくことが大切であると考えてきました。まずは、その土台として、子ども自身の「好きなこと、好きな人をつくり広げる」ことが大切だと考えました。

また、子どもが学習や生活の主体であることから、人の言いに慣れていたり、他者や他者の活動に無関心でいたりすることなく、どのような発達や障害の状況であっても、自分なりの思いが出せることを大切にしたいと考えてきました。

4 全校テーマに基づく小学部研究から学んだこと

(1) 研究方法と経過

全校テーマと小学部テーマに基づき、授業研究を重ね、「小学部段階で育てたい力」を論議し、全校に提案してきました。研究スタイルは、毎回、実践報告のあと、小グループ論議を行って、全員発言ができるよう、自分の担当の実践に引き寄せて一緒に考えることができるようにし、小学部全体の観点が持てるように工夫しました。

授業研究については、学部テーマに基づくことを追求し、グループ論議を経ることで、障害に応じた教育上の配慮点などが、より明確になるようにしてきました。小学部全体の観点と障害に応じた観点が両輪になるようにと考えてきたのです。

また「授業研究」にあたっては、小学部児童の実態に基づいて「授業」を「学校生活全体をとらえたもの」と、広義に押さえ直しました。障害の重い児童が多い小学部では、時間割を切り取った一つ一つの授業研究からは、「育てたい力」を導き出すことが難しいと考えたからです。児童の全体像や生活全体を踏まえて日々の授業がつくられています。「授業」を広くとらえた上で「育てたい力」を考えるため、ケース研究会等も含め、授業をもとにした研究会を行ってきました。

26年度2学期に、各グループからの報告をもとに行った学部研究会は次のとおりです。

Aグループからは、3組の課題学習の授業づくりの報告がされ、それにもとづき、学部全体で授業研究を行って、子どもの課題に応じた授業改善等について話し合いました。

Bグループからは、合同音楽の授業内容と子どもの様子をもとに、主体性をどう考えるかという提起がされ、全体で論議をしました。

Cグループからは、3年生のS君のケース報告をもとに、拒否を適切な方法で伝える力を育てることについて提起があり、全体で論議をしました。

これらの研究会で「小学部段階で育てたい力」や実践で大切にすることを論議し、積み重ねてきました。研究会を進めていく中で、グループごとに「育てたい力」を論議し、それを受けて学部全体でも話し合うという方法で研究を進めました。このことで、障害の特徴を踏まえつつ、障害の違いを越えて「小学部段階で育てたい力」を明らかにし、全校研究会で提案しました。

(2) 「育てたい力」と大切にすること

これらの研究会を経て、「小学部段階で育てたい力」を、次の3点に絞りました。これらは、子どものすべての活動や生きていく土台となってくるものであり、小学部段階でしっかり培っておくことが大切な力であると考えています。

① コミュニケーションの力(コミュニケーションマインド・スキル
両面)

② 信頼関係、人への信頼感・安心感

③ からだの力(生理的基盤、身体感覚、運動)です。

その他にも、これまでの研究会での報告や論議の中で、次のような点が大切なこととして出されました。

① 遊びを豊かに行き、興味関心を広げること

② 主体的に物事に向かい活動すること

③ 社会性を育てること(1対1の関係から、よりいろいろな人の中で過ごせたり関わったりできるようになる)このことから、中学部での集団を大切にしたい取り組みへつなげていく見通しも話されています。

④ 感情表現・思いの表出・自己決定の力(小学部テーマにある文言の「自分の思いが出せる」という点に関わって)

これらが、今回3つに絞った「育てたい力」に近いことからだと考えます。

また、全校テーマにある文言の「自分らしく」という点に関わって、教育は子どもの願いを探り、子どもが役割意識や誇り・自己肯定感をもって生きていくことを支援する役割を担っています。

(3) 3つの育てたい力について

① コミュニケーションの力

教育のどのような活動をするにも、人とのコミュニケーションで裏打ちされていることが大切です。これまでの研究活動(授業研究や事例研)の中で、コミュニケーションに関わって以下の用に整理しました。

障害の重い子どもが多い小学部では、表出・発信、受信、やりとりにより大きな制約を受けている子どもが多くいます。

- ・とりわけ、表出や発信の難しさをもつ子どもからは、何を表現し伝えようとしているのかを読み取り、意味づけたり言語化することが大切であること。
- ・読み取りが特定の教師の主観に陥らないために、複数の目で読み取ること、またその時の活動の目的に照らして、教育的な観点からの意味づけであること。
- ・重度肢体不自由の子どもは、発信に時間がかかることがあり、やりとりに十分な「間」が必要であること、また、口元や目元、頬などの微細な動きをとらえて理解していくことが必要であること。
- ・知的障害や自閉症スペクトラムの子どもに関しては、不適切な形でのコミュニケーションになる場合も多く、より適切に伝えられる力を、あらゆる機会を通して様々な方法で育てていくこと。とりわけ、拒否(NO)を適切な形で伝える力を育てること。

② 信頼関係を築く

信頼関係は「育てたい力」なのかという論議もありました。しかし、近年の児童のさまざまな実態から、信頼関係は、人として尊重し合い、取組を共有する中で、大切に育てていくべきものだという話も話し合いました。何の取り組みをするにも、子どもとの関わりをもつにも、子どもを教育的・発達の観点に基づいて、信頼して働きかけ、子どもからも信頼される関係がベースとなります。子どもからの信頼ということに関わって次の様に整理しました。

- ・「友だち、先生、学校大好き！」と子どもが思えること
- ・ありのままを受け止めてもらっているという安心感
- ・楽しい活動、興味ある活動、手応えのある活動などを共にを行い、「たのしいね」「やった！」「あー、おもしろかった」等の良い感覚や実感を共有し共感し合えること
- ・この人といったら安心、この人と一緒なら「やってみよう」と思える、この人といったら楽しいこと・おもしろいことがあると期待できること。

これらは活動を共にする中で培っていくものだと考えます。

③ 「からだの力」を育てる

「からだ」に関する取り組みは、障害が重度な児童が多い中であって、身体を通してその子の認識や内面に働きかけるものとして、多く取り組まれています。「からだの力」を育てることについて、以下のことを話し合ってきました。

- ・学習や生活の基礎として、生理的基盤を整えること
- ・揺さぶり遊びなど全身を大きく揺さぶり働きかけること
- ・まだ、身体が小さく柔軟な間にダイナミックに身体に働きかけ、心を揺さぶっていくことが大切であること
- ・幼い間にスキンシップを兼ねていっばいだっこすること
- ・身体の変形・拘縮がおこってくる前に機能や能力を維持・向上させること

子どもの心身の成長期にあつて活動や生活の基盤となる「からだ」を育てることは、とても重要であることは周知のこととなっています。しかし、大切にすべき内容をもう少し掘り下げてみようということで、今年度の研究内容としています。

(4) その他、授業研から出されてきたいいくつかの大切にすべきこと

- 主体性(子どもが主体的に活動すること)について考えられました。教師や子ども同士の信頼関係を築きながら、子どもが活動の目的や意味を理解し、自発的に活動に向かうことを大切にしたい授業や指導について考えてきました。
- 「遊びを豊かに行き、興味関心を広げる」という点につ

いて、これまでの授業研究の中からいくつか紹介をします。

一つは、肢体不自由を含む重度重複クラスでの探索活動を目的とした授業です。ここでは子どもがわかってできるよう、また、興味を持って自ら向かいやすいように、好きな要素を教材や授業の流れに取り入れていました。また、回を重ねるに従い「これでこうする」(活動と物や場面との関係)という理解と経験をもとに、少しずつ活動内容に変化をつけ、バリエーションを広げていくことが大切にされていました。

もう一つは、聴覚過敏の子どもを含む自閉症児童クラスの「うた・リズム」の授業研究でした。ここでは、「聴覚過敏＝音楽的な取り組みはできない」とするのではなく、「聴覚過敏」の中身を、自分でするならOK、見通し・つもりが持てたらOK、受け入れられる種類の音がある、その時の全体的な体調・調子も関係ある、など掘り下げていきました。そして子どもの実態を日頃の生活全体の中から丁寧にとらえ、音楽的な学習にもアプローチする手がかりとしていました。

とりわけ小学部段階には、ものごとに対する子どもの受け止めが柔軟な間に、子どもの興味関心の窓口を受け止め、活動の基盤を丁寧に探り土台を広げていくことが大切であること等を話し合ってきました。

(5) 今後の課題

- ① 3つにしばった「育てたい力」や、その他のキーワードとなってくる大切なことからの関係性を整理していく。
- ② 「からだの力」の中身を掘り下げ整理する。「身体が小さく柔軟な間に、身体をつかった活動に十分に組み込む」ということが話されてきたが、まだその中身が十分ではない。
- ③ 小学部は、6年間という長い期間である。12年間の学校教育の入り口であり、人との信頼関係や、からだづくり、コミュニケーションの力を育てる基盤づくりの時期であると言える。さらに、小学部の中でも、入り口としての低学年と、中学部に向かう高学年とにくくって、それぞれの重点を整理することも必要である。
- ④ 「小学部段階で育てたい力」を、小・中・高の12年間の流れの中でとらえ、各学部から出されてくる「育てたい力」の関連性(継続性や発展性)を整理していく。

以上が、テーマに沿った研究の、今後の課題です。